平成二十九年度　市川市芸術文化祭参加作品

雪やこんこん

～湯の花劇場物語～

井上ひさし　作
吉原　廣　演出

消滅寸前の旅一座、女座長・中村梅子　起死回生の大芝居！

「裸で横に歩く奴が栄えて、まっすぐ芸で押してきた者がバカをみる世の中は認めない。
この頭の上の空に日光、月光そして星の光と、三つの光があるうちは、どう落ちぶれようと
中村梅子、役者としての魂をくもらせたくない料簡だあ！」

市川市文化会館小ホール
２０１８年２月３日（土）　１１：００～Aプロ　１５：３０～Bプロ
２月４日（日）　１１：００～Bプロ　１５：３０～Aプロ

主催　市川市邦楽連盟　市川市

松島庄吉郎
市川市邦楽連盟会長

本日は「市川市邦楽連盟」公演開催にあたりまして、ご多用中のところ賑々しくご来場賜り、誠にありがたく厚く御礼申し上げます。

三年前に市川の民話「おかね塚」、昨年に長谷川伸「瞼の母」と上演し皆様方のご好評を頂きました。今年は井上ひさし「雪やこんこん」に挑戦いたしました。

出演者一同、本日の晴れの舞台をめざして稽古に励んで参りました。何卒ご高覧の上、あたたかいご声援を、ご高評を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

“旅の一座”

演出：吉原　廣
ＮＰＯ法人いちかわ市民文化ネットワーク代表

本日はご来場誠にありがとうございます。
今回は昭和29年冬の大衆演劇の旅の一座の内輪を描く作品です。

“旅の一座”…何ともロマンチックな響きですが、青春の思い出が甦ります。昭和40年代の終わり、劇団の若手スタッフとして初夏の北海道を一月あまり巡業して廻ったことがありました。清々しい美味しい楽しい初旅でした。釧路での空き日の夜、皆で浅草ストリップと銘打ったショーを観に行き、同じ“旅がらす”の間柄と終演後楽屋にストリッパーたちを訪ね賑やかに懇談しておりました。

そこにストリッパーの幼子がいました。私に懐いて騒いでおりました。ヒモの継父が「もう寝ろ」と何度か忠告していましたが、子どもは興奮して言うことを聞きません。ついに怒った男は幼子の頭をつかみ、左脚でその子の首を蹴飛ばしたのです。幼子は奥の部屋へとぶっ飛んでいきました。
幼子の押し殺した泣き声と男の苛立つ眼が忘れられません。無遠慮に男の領域を侵した私たちへの当てつけでもあったのでしょう。お調子者の青二才が初めて知った“旅の一座”の厳しい現実でした。

時は移って、稽古場では私自身の「興味関心の変化」を味わっています。
かつて歌舞伎や新派など日本の伝統芸への関心は低く「新劇こそ我が世界」と意気込んでいた私が、今代役を買って出て七五調の名台詞を楽しんでいます。できればいつか舞台（イタ）に立ちたいものです。

さて、井上ひさし喜劇…私もこれまで随分とお世話になってきましたが、心から笑える舞台にはそうめったにお目にかかれないものです。演じる側が上品すぎるからだと思います。生き恥をさらす領域まで踏み込めてないからだと思います。寅さん風に言えば、さしずめ“インテリ”の演技だからです。今回は、下品にいきます。泥臭く演じます。成功すればいいのですが…。

山下香澄（中村梅子）

7年前のワークショップでラストシーンの中村梅子を演じたことがありました。梅子の芝居への燃えるような情熱が、一瞬、全身に乗り移ったように感じ、いつかは全幕演じてみたいと思っていました。お客様の笑顔だけを糧に芸に打ち込み、頑固に我が道をゆく役者でありながら、涙もろくて人情家。そんな人間臭い梅子にどこまで近づけるでしょうか。

名倉ゆみこ（佐藤和子）

幸せです。こうして舞台に立てることが。緞帳が上がる。客席の皆様のワクワクするお心が舞台に届いてまいります。芝居が好きです。たった2日間の公演ですが、心と体のすべてを捧げて稽古する。幕が下りれば、全ては記憶の中だけに。一期一会です。
舞台は生もの。「何がおきるかわからない 」今日のお客様とも一期一会。演ずる仲間とも、次回も一緒とは限りません。今日、こうして舞台に立てること。「お芝居をすること」を選んだ、私の人生。偉いぞ！すごいな！あんたの選択は間違いない。幸せです。

加藤俊明（久米沢勝次）

私は昭和21年生まれなので、生まれ育った行徳にもまだ「ことぶき館」という芝居小屋が在りました。浅香光代などの旅芝居を観たことがあり、小屋の熱気と興奮をおぼろげながら覚えています。先日、浅草の「木馬館」へ現代の旅芝居を出演者仲間で観に行き、独特の雰囲気を感じて来ました。今日は変わる社会の中で貧しくも信じた道を逞しく生きている人々を感じられ、観に来てよかったと思えるような芝居になるよう頑張ります。

小助川一博（立花庫之介 Aプロ）

6年前、こまつ座で高畑淳子主演のこのお芝居を観た時の感動を今でも思い出します。同じお芝居に出させて頂く機会を与えて頂いた事に感謝し、あの時以上の感動を与えられたらなぁ、と思っております。

上山恵司（立花庫之介 Bプロ）

初めて、井上作品に参加する事になり、台本との大立ち回りの連続でした。どこまでテンポ良く、小気味に、皆様にお楽しみ頂けるかどうか･･･楽屋裏～　おかし、哀し、これ又　役者の世界･･･さぁ、御覧あれぇ～

根岸英之（秋月信夫 Aプロ）

金吾とどちらをやるか、両方稽古した上でいただいた信夫役。二枚目だけど、人間味ある大衆演劇役者をお見せできたら。新派あり、ドタバタあり、股旅踊りあり、羽二重化粧あり。いろいろな芝居の魅力をお楽しみくださいませ！

豊田 実（秋月信夫 Bプロ）

私は、40年近い以前、私を魅了した、井上ひさしの舞台の録画を大切にしています。数年前までこの自分が、「井上ひさし」の舞台に立つなど思いもしませんでしたが、色合いの違う今回の物語でも、今に続く「あんなふうに言ってみたい」という記憶が力になってくれそうです。

石田和代（三条ひろみ Aプロ）

駆け出し役者ではございますが、お客様に少しでも笑ってもらいたい、喜んでもらいたいという思いで今日まで稽古をしてきました。私自身は公演中ハラハラドキドキの連続になると思いますが、とうぞ楽しんで下さいまし。

梅原ひろみ（三条ひろみ Bプロ）

劇中、踊りの稽古をするシーンで、ガニ股や見得を切る動きの「男役」に旅役者の面白さを感じます。そしてなんともしっくりくる。今日からこの一座で日本各地を回りたい！まずは市川公演をお楽しみください。

テリー高橋（明石金吾 Aプロ）

ご来場有難うございます。女形の明石金吾を演じます。べらんめー野郎はまだしも、女形の役が務まるものかどうか戸惑いました。昨秋より稽古を重ね、気丈な男と女形のコントラスト表現を念頭に本日の舞台に臨みます。

小松英彦(明石金吾 Bプロ)

中村梅子一座も真っ青な、貧乏役者です。「お客様のいいお顔が心のオマンマ」だという梅子座長の言葉を胸に、今日の本番に臨ませていただきます。ごはんに合う、幸口のご感想もお待ちしています。

須藤文江(女中お千代 Aプロ)

芝居なるものをやり始めて13年目にして初めて16才の若ーい役をおおせつかった。うーん、顔のしわはともかくも、少し頭の足りなそうな、元気いっぱいの女の子なら、何とかなるかも知れん。若返ったすーをお楽しみに！

山田澄子(女中お千代 Bプロ)

「夜も昼もぺっちゃりと楽屋についていなさいと云いつかって、佐藤旅館から回されてきました。」女中のお千代は、おかみさんの一の子分。純朴で好奇心旺盛。お千代の元気がお客さまに届きますように。

水野文也(光夫くん Aプロ)

実年齢より、ン十才若い役どころ。大河ドラマなどで、「おいおい、若過ぎだろ」などと思いながら観ることもしばしばでしたが、まさか自分がそんな立場になろうとは…。でも、そんなことは気にせず、思い切って演じます！

松永智充(光夫くん Bプロ)

日常生活ではおじさんですが、ここ数ヶ月、時には終電まで及ぶ稽古の甲斐もあり、何となく気持ち的には18歳になれたような気が自分ではしてますが…

井上ひさしと「雪やこんこん」

～観劇のお手もとに～

井上ひさしさん（1939 - 2010）は、山形県に生まれ、1956年から浅草フランス座で芝居を書くようになり、1967年から1987年まで市川市に暮らしました。「雪やこんこん」は、1987年に井上作品の専門劇団「こまつ座」で初演されました。

井上さんは、「昭和庶民三部作を書き終えて」という文章で、次のように記しています。

〈幼い頃、（略）町に「小松座」という小屋があって、そこへひっきりなしに旅芝居がかかるものですから、毎晩、見物していた。それに学生時代は浅草フランス座で働いていましたし、谷幹一さんの紹介で旅芝居の一座でお囃子方をやったことがあります。（略）実情はレコード係ですね。それに拍子木を打ち、ツケ板を叩く係。臨時という約束で群馬、埼玉をひと月ばかり回りましたが、当時の大衆演劇というのは台詞がじつにいいんです。（略）意味もおもしろいし、音のひびきも美しい。舞台言語ってこういう台詞のことを云うのかと、とても感心して、そういう台詞を収集しました。立花倉之介という古い役者さんに四週間ほど来てもらって、彼の頭の中に仕舞ってあった名台詞を片っ端から云ってもらって、それをノートにとったりもしました。もう一つ、旅芝居が好んで上演する演目の筋書にも興味をもっていました。自己犠牲、報恩、助け合い、正義は勝つ……そういった庶民の理想が旅芝居の舞台では次々に実現して行くわけですね。そこで彼等の演目の筋書を分析し、整理すれば、庶民の夢をつきとめることができるのではないか。そこで、『雪やこんこん』のストーリィに、旅芝居が得意の演目としている筋書を援用しました。台詞は、これまで収集したものを手本に、聞いて快く分ればおもしろい台詞をと心掛けました。〉（初出1988年。『井上ひさしエッセイ集７悪党と幽霊』1989年 中央公論社 所収）

「雪やこんこん」は、昭和29年の設定ですが、井上さんの芝居経験に重なっていますね。大衆演劇が時代の流れで廃れてしまっても、「芝居には人生を前向きに変える力と夢がある」という、井上さんの願いが込められているといえるでしょう。

この作品は、国府台陸軍の脱走兵とその家族を描いた「きらめく星座」（1985年）、進駐軍占領下の神社を舞台にした「闇に咲く花」（1987年）と併せて、「昭和庶民三部作」と称されます。変わりゆく時代の大きな流れのなかで、押し潰されそうになりながらも必死で生きようとする庶民の姿が描かれている点が、共通している作品群です。

「雪やこんこん」の座長は、解体寸前の芝居小屋での女座長を描いた一人芝居「化粧」（1982年）の座長の姿と重なるとも、井上さんご本人が述べています（「前口上」『the座－「雪やこんこん」再演号』1991年 こまつ座）。

ほかにも劇団や演劇をテーマにした作品に、「ある八重子物語」（1991年）、「黙阿弥オペラ」（1995年）、「紙屋町さくらホテル」（1997年）、「ロマンス」（2007年）などがあります。

井上さんは、演劇に対する熱いこだわりを、繰り返し作品に描き込んでいたことが見て取れます。

井上作品はまた、「音楽」が重要な役割を持っています。この作品でも美空ひばりの歌などが欠かせない要素になっており、見どころの一つです。

井上さんは晩年の2004年から、市川市文化振興財団理事長に就任し、市川にも演劇文化が根付くようにと願っていました。

今回、三味線の生演奏付きの市民による公演は、井上さんの願いの一つの現れとして、大きな意味を持つことでしょう。客席の皆さまも、その〈担い手〉であります。大いに、芝居の素晴らしさを感じていただければ、座員一同、これほどありがたいことはございません。

（文・根岸英之）

『雪やこんこん』
装幀・安野光雄
1987年 朝日新聞社

セリフに出てくることば解説

黙阿弥　河竹黙阿弥（もくあみ）。江戸時代幕末から明治にかけて活躍した歌舞伎狂言作者。

イタ　舞台。

頭取　劇場の楽屋庶務を担当する役。

股旅踊り　各地を流れ歩く博徒（ばくと）を主人公にして義理人情の世界を歌に乗せて踊る演目。

軽便鉄道　費用を抑えるために低規格の軽量で狭いレールで敷かれた。

新国劇　1917年（大正６年）に結成された劇団で、歌舞伎よりもリアルな立ち回りを多用した時代物で人気を博し、戦前から戦後にかけて全盛期を迎えた。

木戸番　興行場の木戸口を守り、客を引く番人。

新派　1888年（明治21年）に始まった日本の演劇の一派。「壮士芝居」「書生芝居」などをもとに歌舞伎とは異なる新たな現代劇として発達し、「旧派」の歌舞伎に対し「新派」と称された。

尾羽（おは）打ち枯らす　鷹の尾羽が傷ついてみすぼらしくなることから、おちぶれてみすぼらしいさま。

奈落　舞台や花道の床下の空間。回り舞台や迫り出し装置などがある。

国定忠治　江戸時代後期、上州一帯を支配した博徒。赤城山を根城に幕府の役人と戦ったが、追われて子分と別れる場面が有名。

お島仙太郎　川口松太郎の「蛇姫様」1939年（昭和14年）が原作。家老の息子を斬った千太郎が、旅一座に身を隠し、一座の花形お島と恋仲になる物語と、お家騒動のてん末を描く。

突っころばし　歌舞伎の上方和事の役種の一つで、柔弱でやや滑稽味を帯びた立ち役。「肩を突いただけでも転びそうな」意。

着到（ちゃくとう）　到着に同じだが、歌舞伎などで役者が楽屋に入ることや、上演を知らせるお囃子を指すこともある。

大根役者　大根が白いことから「素人」とかけたとする説や、下手な役者ほど白粉（おしろい）を塗りたくることとかけたとする説などある。

浅草常盤座　1884年（明治17年）、浅草六区に建てられた演芸場。1948年（昭和23年）日本で初めてストリップショーを開催した。

寺子屋　歌舞伎『菅原伝授手習鑑（かがみ）』の名場面で、主君の子を守るため寺子屋の教え子を殺害したが、それは首実験にやってきた松王丸が身代わりに送り込んだ子だった。

黒御簾（みす）　歌舞伎の舞台で、主に下手（しもて）に半透明の黒い布を張り、その中で演奏される効果音楽。

鼻下長（びかちょう）　鼻の下が長い者は浮気だとされることから、女に甘い男のこと。

瞼の母　長谷川伸が1930年（昭和５年）に発表した戯曲。博徒の忠太郎が、幼いころ別れた母と料理茶屋で巡り合うが、母は我が子と気付きながら追い返してしまう物語。

日本橋　泉鏡花が1914年（大正3年）に発表した戯曲。日本橋の芸者お孝と清葉、医学士の葛木を巡る悲恋物語。

浅草吉景館　1951年（昭和26年）、浅草山谷に建てられた芝居小屋。一流と認められた劇団しか出演できない大衆演劇のメッカだった。

はな　ご祝儀。

金丁（きんちょう）　金打（きんちょう）とも書き、誓いの印として、金属製の物を打ち合わせること。武士は刀の刃または鍔(つば)、女子は鏡などを打ち合わせた。

はね　閉場。

前狂言　狂言は「出し物」の意で、２～３本の芝居を上演するうち先に上演する芝居で、幹部や若手が主演を務める。

西の海へさらり　厄払いのことば。悪事・凶事・災厄などを払いのけて西の海へ流してしまう意。

床几（しょうぎ）　木の板に脚を付けた腰掛。